問題状況における行動のし方に関する心理治療者の態度[1]

佐々木（石沢）由利子
星　　野　　命

問題と目的

本研究は心理治療者と呼ばれる人々の態度についての一つの研究の試みである。人はその持つ仕事によってものの見方や考え方がちがうものであるが，心理治療という仕事に携わる人々も当然治療者としての集団に特有のものの考え方一態度を持つと考えることができる。従来心理治療者についてはその態度の中にある治療的な要因などについて数多くの研究が行なわれてきたが本研究は心理治療者の持つごく一般的な，人間に対する考え方一人間観について探ろうとするものである。

連名者の一人，佐々木は心理治療者の持つ人間観は禅における人間観に似通ったものがあるのではないかと考えた[2]。それが禅的な人間観であるといいきることはできないが，その人間観は次のようなものである。

外部的な処置や方策などで片付く問題は別として，個人が自分の悩みのもととなっている自己の問題を解決し，心理的適応を達成するのは，その個人が自己の問題を対象化して眺め，あれこれと解決のための手段を考えるのでなく，むしろ問題を意識せず，自分のいる状況の中で今現在の時点

---

(1) 本研究は本学大学院教育学研究科修士請求論文における佐々木由利子「問題状況における行動のし方に関する心理治療者の態度について」の一部を修正加筆したものである。

(2) これはＳＴに参加して得た佐々木自身の体験をもとに，鈴木大拙の禅についての著作を読むことによってこのように考えるにいたったことを付記しておきたい。

をありのままに生きる時である。ありのままに生きるとは具体的には，個人が自分のいる問題状況の中で次のように行動することである。一その場に起こりつつあることを敏感に感じとり，問題状況について考えるゆとりもなく[3]，解決しようとすら思わず，理屈や善悪をこえてそうなるしかなかったかのように，瞬間的に，自分が何々しようとか何々しているという意識もなく[4]，自分の内部に生起した感情のままに行動する。人の言葉に対して言葉そのものの意味によりも，言葉のうらにある気持に対してこたえるので，前後の経緯から飛躍した答になることもあるが，状況の中で問われている根本的な問題に対して自分なりの答を与える一個人がこのように生きる時，その個人が意識すると否とにかかわらず，彼は自己の問題の解答を生きている。以上がその人間観である。

心理治療者は上述のような人間観を持つのではなかろうかというのが本研究の基本的な仮説であるが，はたして実際にそうであろうか。本研究は心理治療者の態度を調査することにより治療者が上述の人間観を持つや否やをしらべようとするものである。

上述の人間観にあらわれた行動のし方を自然反応型と呼ぶことにする。本研究は心理治療者の自然反応型の行動についての態度を調べることになるが，このためにPorter (1950) のテストにヒントを得た質問紙が新たに作成された。Porterのテストはクライエントの発言に対するカウンセラーの5つのタイプの反応——評価的態度，解釈的態度，支持的態度，診断的態度，理解的態度——を選択肢として含むテストであるが，伊東 (1963) はカウンセリングの勉強者に勉強前と勉強後の2回，このテストに回答させたところ，事前テストでは診断的態度の得点が最も高いのに事後テスト

(3) ダッシュ内の文章は実験調査に用いられたものなので，そのままここに掲載するが後に表現が不適切，あるいは説明不十分と思われる箇所があった。この「考えるゆとりもなく」という表現は知的に分析考察している間もなくという程の意味である。

(4) 意識が全くないというのではなく，自分のしていることがはっきりわかっているが，それをことさら意識するのでなく，また意識的に行動するのでないということ。

では低くなり，事前テストで余り高くない理解的態度の得点が事後テストで増加するという全般的傾向が見られた。治療とはよく言われるように相手を共感的に理解するところからはじまる。しかし Porter の理解的態度というカウンセラーの反応のし方は場合によっては相手を言葉の上だけで客観的に理解していることを示すにすぎないということもありうる。相手の気持を本当に共感的に理解できたら「あなたは…なのですね。」と言う以上に何らかの積極的な行動でこたえることになる場合があるのではないか。それが本研究のとらえようとする自然反応型の行動と名付けられたものである。(5)

Rogers にせよ Gendlin にせよ治療の理論としてのカウンセリング理論においては Rogers が体験過程とその象徴化の一致，Gendlin が体験過程に導かれて概念化が行なわれるというように，体験している感情の正確な概念化，言語化が常に重視され，Porter のテストの理解的態度もその一つの反映といえるが，自然反応型の行動においては体験している感情とおもてにあらわれた行動が一致しているかどうかを問題にする。これが上述の「感情のままに行動する」という表現である。たとえば個人が怒りを感じたら怒りを実際に行動で表現することを意味するのであり，その表現は「私はあなたのことを本当は怒りたかったのです。」というよりも実際に怒った顔，あるいは「私はあなたのことを怒っています。」という直接現在の形での表現となるはずである。しかし，それは決して無制限に自分の感情のおもむくままに行動することではなく，個人が自分のいる状況の中で起こりつつあることを敏感に感じとった結果，それへのごく自然な反応として起こってくる行動のことなのである。自分をとりまく外界からの刺激に対する個人のむしろ受身に触発された必然的な反応であり，それであればこそ，

(5) Porterのテストはクライエントの発言に対するカウンセラーの反応について調べるものであり，一方本研究の質問紙は後に述べるように日常生活の問題場面での普通の人の行動について調べるものなので場面設定が異なり，同一には考えられないが，自然反応型の行動は治療場面におけるカウンセラーの態度としてもあてはまるものと筆者は考える。

意図されたり計画されたりしないたくまざる動きとなるのである。従って，たとえば明らかに途方にくれている相手を目の前にしていつまでもひとりで怒っているというような行動は自然反応型にはあてはまらないのである。

心理治療者の態度についての研究は数多くあるが，本研究に関連すると思われるものは上記のPorterのテスト以外特に見当たらないので他のものはいちいち紹介の手間を省く。自然反応型の行動は治療者のみでなくクライエントの行動としてもとらえることができるが，治療によるクライエントのパーソナリティの変化の研究で自然反応型の行動と似通った問題を追求している研究に次のものがある。Rogers & Rablen（1958）のサイコセラピイの過程を客観的に評定する過程尺度の研究であるが，この尺度の第6，第7段階には，瞬間的な感情の体験，受容および表現，体験過程の反射的自覚としてある自己，対象としての自己の意識の消失，同じく対象物ではなくなった問題の中に生きているクライエント等の記述が見られる。Walker, Rablen & Rogers（1960）はこの過程尺度の信頼性と妥当性を検討してよい結果を得た。Gendlin, Jenny & Shlien（1960）は成功したセラピイのクライエントは現在の治療者との関係の体験自体が彼の持っていたもっと一般的な問題の一つの例であることを見出し，その体験が彼の問題の最初の克服という新しい体験となること，また彼の諸感情を報告するよりも直接的に表現するようになることを見出している。また Gendlin & Shlien（1961）は時間の制限されたセラピイにおいて成功したセラピイのクライエントは時間態度項目のQ分類において，高い即時性の得点を得るという結果を見出している。

既述のごとく本研究では自然反応型の行動についての心理治療者の態度を調査するため質問紙を作成し，用いることにした。質問紙という調査の方法はいろいろ問題点もあるが，研究を行なうのに時間的技術的に多くの制約がある場合，調査時間も短くて済み，融通がきく簡便な一つの方法としてここに質問紙の作成を試みたわけである。同時に質問紙の選択肢項目に自然反応型の行動の項目を登場させることにより自然反応型の行動の具

体的なイメージを与えることを試みるものである。

今までのところですでに述べてはきたが，本研究の目的を再びここにまとめてみると次のようである。

1)　心理治療者は上述の人間観を持つものや否や，心理治療者の態度を調査することにより調べる。

2)　上述の目的を持つ調査のために質問紙を構成するが，この質問紙の構成と検討が本研究のいま一つの目的である。

方　　法

1.　質問紙

態度調査紙「問題状況における行動のし方に関する質問紙」が作成された[6]。質問紙は15の小問から成り，そのそれぞれにある人が問題に直面した状況を述べた物語の本文と，その後にその人のとり得る3つの可能な行動を記した選択肢がある[7]。物語にはいわゆる治療場面ではなく日常的な場面での問題と禅の逸話的なものがとりあげられた。被験者は物語の問題の当事者にその次にとってほしい行動を選択肢のうちから必ず1つ選ぶように求められる。

各問の3つの選択肢項目に記述された行動はそれぞれ次の3つの行動のし方のカテゴリーに従って作られた。

道徳・規範型（カテゴリーM）…そのような場合にあてはまる道徳や規範にてらして行動する。

自分自身をも含めた問題状況を道徳や規範にてらして善悪の価値判断を下し，道徳や規範に従ってそのような場にふさわしいと思われる行動をし，相手の方が悪いと認めた場合には，相手の行ないを改めさせようとする。

---

(6)　APPENDIX　1の質問紙参照。

(7)　選択肢ははじめ5選択肢をもうけ，項目の内容的妥当性の検討の予備調査を行なったが，結果がおもわしくなかったので，予備調査の結果のよかった3選択肢（勿論自然反応型も含まれる）を質問紙の最終的なフォームに採択した。

客観的理解型（カテゴリーO）…問題を客観的に理解し，自分の理解したことを相手に伝える。

自分自身を含めた問題状況を客観的に対象化して眺め，状況を知的に理解し，個人的な気持や感情は度外視して状況について自分の理解したことを客観的にのべる。あるいは分析・説明・解釈する。

自然反応型（カテゴリーS）…問題状況のなりゆきから自分の中に生起した感情のまま自然に行動する。

その場に起りつつあることを敏感に感じとり，問題状況について考えるゆとりもなく，解決しようとすら思わず，理くつや善悪をこえてそうなるしかなかったかのように，瞬間的に，自分が何々しようとか何々しているという意識もなく，自分の内部に生起した感情のままに行動する。人の言葉に対して言葉そのものの意味によりも，言葉のうらにある気持に対してこたえるので，前後の経緯から飛躍した答になることもあるが，状況の中で問われている根本的な問題に対して自分なりの答を与える。

上記の3つのカテゴリーは内容的に次の2種類に大別される。

(1) 問題の当事者がその時点で，問題を解決しようと自己を含めた問題状況を対象化して眺め，問題解決のための意図的な行動をしている場合。禅の言葉でいえば有心——心の中に何かがある状態。道徳・規範型と客観的理解型がこれにあたる。

(2) 問題の当事者がその時点で，その状況の中でただあるがままに生きているだけで，問題を解決しようと自己を含めた問題状況を対象化して眺めることなく，問題解決のための意図的な行動をしていない場合。禅の言葉でいえば無心の状態。自然反応型がこれにあたる。

本研究は次の仮説の検証を試みる。

仮説：心理治療者は心理治療者でない者に比べて，質問紙への回答において，自然反応型の項目をより多く，道徳・規範型，客観的理解型の項目をより少なく選ぶであろう。

質問紙の15の問題は大まかに4つのタイプに分けられる。禅仏教に関す

る特殊なものがその1つで，あとは自然反応型の行動のあらわれ方によって3つに分けられる。すなわち次の4つである。[8]

タイプ1…行動的なもの（問題1，6，10，12）

タイプ2…素直さのでてくるもの（問題2，5，7，11）

タイプ3…怒りのあらわれるもの（問題3，4，8，9）

タイプ4…禅仏教に関するもの（問題13，14，15）

先に述べたように本研究の質問紙は Porter のテストの理解的態度の一歩先をさぐることを目ざしている。Porter の理解的態度は場合によっては共感的というよりも客観的な理解の態度となることもあり得る。Porter のテストはその点について区別することができない。本質問紙はこの違いをはっきりさせるため，いくつかの問題の客観的理解型の項目に Porter の理解的態度に似た「あなたは…なのですね。」タイプの反応を盛り込んで調べてみることにした。

2. 被験者と手続き

質問紙のおもて表紙に教示が印刷され，心理治療の仕事の経験や宗教等に関する付加的質問の付された回答用紙，コメント記入用の白紙[9]とともに被験者に渡された。

心理治療者の被験者には主に次の3つのルートにより回答を依頼した。

(1)本研究の一部の指導に当った星野による紹介者へ郵送で依頼。

(2)日本カウンセリング協会主催第17回湯河原カウンセリング・ワークショップ（1971年7月25日～29日）で世話人に依頼。

(3)日本カウンセリング協会事務局による紹介者へ郵送で依頼。

上記(1)の紹介者へは回答依頼状，紹介状，返信用封筒を同封して往復郵送で依頼。カウンセリング・ワークショップにおいては筆者が各世話人に個別に質問紙を渡して回答を依頼し，後日回収した。ワークショップ期間中に回収できなかった回答は郵送による返送を依頼した。カウンセ

(8) 各々のタイプの意味するところの詳しい内容は佐々木の修論を参照されたい。

(9) コメント記入用白紙は心理治療者にのみ渡された。

リング協会事務局による紹介者へは紹介状を除いて上記(1)の紹介者と同じ方法で回答を依頼。郵送により回答を依頼した者には指定した期日を過ぎても回答のなかった場合，2名の例外を除いて全員催促の葉書を送った。

上記のほかに，回答の過程でどのようなことが問題になるのかを知る目的で特に面接により回答を得た9名の心理治療者の被験者がある。質問紙以外のテストは特に施行されず，質問紙への回答に際しての被験者の発言や態度などが記録された。

非治療者の被験者には東京都及びその近郊に在住の佐々木の友人，およびその知人，大学の教授，父母の知人等に佐々木自身あるいは仲介者により回答を依頼した。

調査実施期間は治療者が1971年6月17日～10月5日，非治療者が6月21日～10月31日である。治療者，非治療者ともこの期間内に回収できた回答を有効回答とした。

回答の依頼にあたっては，治療者へは「カウンセラーの考え方，人間観を調べるための調査」と説明し，非治療者へは「心理学の実験調査」とのみ説明するか，あるいは何も説明しなかった。なお治療者の被験者については，回答用紙の付加的質問では治療の仕事について知るのに不十分なことが後にわかったため，電話または郵送により追加質問が行なわれた。

治療者には89名に回答を依頼，このうち期限までに回収できた有効回答は59名，残り30名中26名は連絡なし，2名が〆切後回答到着及び回答不完全，1名が実験条件の違いによる回答無効，1名が回答拒否である。非治療者には予め回答の意志の有無を確かめてから質問紙を渡したので回収できない回答は殆んどなかった。期限までに90名の非治療者の回答が得られ，このうち1名の回答が記入不完全で無効になった。

有効回答をよせた非治療者89名全員を実験群である治療者群に対応する統制群として扱うことは問題があるように思われたので，非治療者の被験者のうち次の条件にあてはまる者が非治療者統制群に選ばれた。すなわち，

心理治療・相談の勉強や訓練の経験がなく，年令24才以上の者（N＝63）である。年令24才以上という条件は治療者群の最年少者が24才であったため。統制群以外の非治療者群の内訳は24才未満群（N＝15），治療訓練・勉強群（N＝11）である。

項目の内容的妥当性の検討

質問紙の選択肢項目の内容的妥当性が心理治療者によって2回にわたり判定された。

第1回は，質問紙制作者の意図ではそれぞれM，O，Sのカテゴリーに相当する内容を持つように作られた3つの選択肢項目とM，O，Sのカテゴリーに相当しない内容を持つように作られた2つの選択肢項目，計5つの選択肢項目を含む質問紙を用いて，8名の心理治療者[10]に3つのカテゴリー記述[11]を読ませ，質問紙の5選択肢のうちからM，O，Sのカテゴリーに相当すると思われる項目を各々1つずつ，ダブらぬように計3つ選ばせるという方法で判定された。判定は個別に行なわれ，調査期間は1971年5月29日～6月9日。

第2回は第1回の判定結果を参考に問題の一部を修正し，質問紙の最終的なフォームを完成した後，これを用いて第1回の判定者とは別な9名の心理治療者[12]により判定が行なわれた。第1回と異なり質問紙の選択肢は3項目のみなので，M, O, Sの3カテゴリーに「その他，以上の3つに分類不能」というカテゴリーを加えた4つのカテゴリー記述を判定者に読ませ，質問紙の各問の3選択肢が各々どのカテゴリーに相当するか，「その他，以上の3つに分類不能」のカテゴリー以外はダブらぬよう判定させた。判定は第1回と同じく個別に行なわれ[13]，調査期間は1971年6月23日～12月10日。

---

(10)　1名は例外で心理治療が専門分野の教育心理専攻大学院生。

(11)　道徳・規範型等の名称は付されていない。

(12)　1名の例外を除いて全員本研究の被験者として予め質問紙への回答を行なっている。

(13)　1組（2名）の例外があった。

Table 1　項目の内容的妥当性判定結果のまとめ（単位%）

問題	カテゴリー	第1回判定	第2回判定	問題	カテゴリー	第1回判定	第2回判定
1	M	75.0	55.6	9	M	100.0	77.8
	O	87.5	66.7		O	87.5	88.9
	S	62.5	88.9		S	50.0	88.9
2	M	50.0	66.7	10	M	87.5	88.9
	O	100.0	66.7		O	100.0	100.0
	S	87.5	100.0		S	87.5	100.0
3	M	87.5	*88.9	11	M	37.5	77.8
	O	50.0	88.9		O	87.5	88.9
	S	62.5	88.9		S	75.0	88.9
4	M	100.0	100.0	12	M	75.0	44.4
	O	75.0	88.9		O	87.5	77.8
	S	25.0	*88.9		S	87.5	55.6
5	M	62.5	66.7	13	M	100.0	66.7
	O	100.0	100.0		O	87.5	55.6
	S	75.0	88.9		S	87.5	88.9
6	M	(注2) 0.0 (100.0)	*77.8	14	M	62.5	77.8
	O	100.0	77.8		O	87.5	88.9
	S	75.0	88.9		S	87.5	100.0
7	M	100.0	88.9	15	M	62.5	77.8
	O	87.5	100.0		O	87.5	88.9
	S	75.0	88.9		S	75.0	77.8
8	M	25.0	33.3	合計	M	68.3 (75.0)	72.6
	O	100.0	44.4		O	88.3	82.2
	S	12.5	*77.8		S	68.3	87.4

（注1）＊印は第一回判定後問題文が多小変えられたもの。

（注2）問題6のカテゴリーMは質問紙制作者の意図した項目とは別な項目に第1回判定者全員の判定が一致していたので，第2回にはその項目をカテゴリーMとして採用した。カッコ内の数字は後に採用された項目を基準とした場合の判定の一致率。

上記2回の妥当性判定結果をまとめたものが Table 1 である。第1回判定結果の数字は各問題のカテゴリーごとに質問紙制作者の意図した項目

との８名の判定者の判定の一致の度合をパーセントで算出したもの，第２回の数字は各問題の質問紙制作者の意図によるカテゴリー項目ごとに制作者の意図したカテゴリーとの９名の判定者の判定の一致の度合をパーセントで算出したものである。

Table 1によれば問題８の各項目は２回とも判定の一致率が大変低く，項目の内容的妥当性に問題があると思われる。また問題12のＭとＳの項目も妥当性に多少疑問が残る。質問紙全体を通じてのカテゴリー別では道徳・規範型の項目の判定結果が余りよいとはいえない。

上述の２回にわたる組合せによる妥当性判定の他，質問紙へ回答した被験者に選択肢項目の３つのカテゴリーを a priori に考えて報告してもらうという方法による妥当性の検討が試みられた。被験者は心理治療者８名，非治療者１名である。結果の詳細は省略するが，被験者全員がかなり明らかにＳとＯに近いと思われるカテゴリーを回答している。しかしＭはこの調査においても被験者に余り明瞭に把握されていないことがわかった。

信頼性の検討

テスト―再テスト法による質問紙の安定度の検討が行なわれた。本調査の被験者のうち再テスト依頼が可能でありかつ困難でなかった者33名に，初回の質問紙への回答後10週～12週の間に再テストの回答を依頼した。33名の内訳は治療者群（Ｎ＝20），非治療者統制群（Ｎ＝11），非治療者24才未満群（Ｎ＝２）である。

得られた２度のテスト結果からまず個々の問題の信頼度が求められた。各問題ごとに第１回選択と第２回選択がどの項目においてであれ一致していた被験者数の再回答者全体に対する割合がパーセントで算出された。結果は Table 2 の通り。

第二に質問紙の各問への回答をそれぞれ１点とし，選択された項目のカテゴリーによってＭ得点，Ｏ得点，Ｓ得点に分類することによって得られる３種類の得点のそれぞれについて再回答者全員の２回のテスト得点の相

Table 2　各問題の信頼度（単位%）

問題番号	1	2	3	4	5
一致率	75.8	63.6	69.7	72.7	57.6
問題番号	6	7	8	9	10
一致率	78.8	66.7	66.7	69.7	78.8
問題番号	11	12	13	14	15
一致率	69.7	72.7	78.8	69.7	81.8

関係数を求めることにより，質問紙全体についての各カテゴリー得点の信頼度係数が得られた。その結果，M得点が $r=.77$（0.1%水準有意），O得点とS得点がともに $r=.83$（0.1%水準有意）であった。

Table 2によれば，問題別では問題1，4，6，10，12，13，15は信頼度が高く，他の問題も問題5を除いては一応満足できる信頼度を持つと思われる。問題5はカテゴリーMの項目の選択の変動が大きく，この項目は妥当性の判定結果もあまり良くないので項目の内容が多義的ではっきりしていないのかもしれない。質問紙全体については，M得点の信頼度係数が他より若干低いが，O得点，S得点の信頼度係数は高く，本調査の質問紙は一応満足できる信頼性を持つと考えてよいであろう。

結　　果

1.　個々の問題における治療者と非治療者の回答の違い。

治療者群と非治療者統制群の回答を問題ごとに整理し，各問題の各カテゴリーの選ばれた度数を表にしたのが Table 3 である。最も多く選ばれたカテゴリーを較べてみると，質問紙全体では，治療者群が15題中M1題，O2題，S13題[14]であるのに対し，非治療者統制群はM2題，O3題，S10題で，治療者，非治療者ともカテゴリーSの項目を多く選ぶ傾向があり，治療者にこの傾向がより強いことがわかる。問題ごとに最も多く選ばれた

(14)　合計して15題にならないのは2つのカテゴリーが同数で最も多く選ばれている問題が1題あったためである。

Table 3　治療者群と非治療者統制群の回答結果

（数字は各項目を選んだ人数を示す）

問題	選択肢番号	カテゴリー	治療者群	非治療者統制群
1	1	O	11	1
	2	S	33	49
	3	M	12	13
	無回答		2	0
2	1	S	34	17
	2	O	3	13
	3	M	19	32
	無回答		1	1
3	1	O	9	6
	2	M	9	25
	3	S	38	31
	無回答		3	1
4	1	M	9	17
	2	S	14	2
	3	O	35	44
	無回答		1	0
5	1	S	22	25
	2	O	12	5
	3	M	21	32
	無回答		4	1

問題	選択肢番号	カテゴリー	治療者群	非治療者統制群
6	1	M	17	24
	2	S	28	38
	3	O	12	1
	無回答		2	0
7	1	M	5	24
	2	O	14	12
	3	S	38	27
	無回答		2	0
8	1	S	7	7
	2	M	5	27
	3	O	47	28
	無回答		0	1
9	1	O	18	20
	2	S	35	23
	3	M	5	18
	無回答		1	2
10	1	M	2	6
	2	S	46	47
	3	O	11	10
	無回答		0	0

問題	題択肢番号	カテゴリー	治療者群	非治療者統制群
11	1	M	7	24
	2	O	5	3
	3	S	46	35
	無回答		1	1
12	1	S	23	3
	2	O	11	40
	3	M	23	20
	無回答		2	0
13	1	O	2	10
	2	M	1	2
	3	S	51	49
	既知者		5	1
	無回答		0	1
14	1	S	41	37
	2	O	14	20
	3	M	3	5
	無回答		1	1
15	1	O	10	26
	2	S	39	28
	3	M	9	9
	無回答		1	0

（注）問題によって被験者数が違うのは，1題に2項目丸をつけた回答があった場合それを除いて計算したためである。

カテゴリーは治療者群と非治療者統制群とで同じものである場合が殆どであるが，異なっている問題も3題あった。

最も多く選ばれたカテゴリーのうえからは両群の回答にそれほど違いがなくても，各カテゴリーを選んだ人数にはかなり差があるようなので，M,

Table 4　各問題各カテゴリーにおける治療者群と非治療者統制群の回答の分布の違いの検定結果

問題	カテゴリー	χ^2の値（除無回答）	χ^2の値（含無回答）	問題	カテゴリー	χ^2の値（除無回答）	χ^2の値（含無回答）	問題	カテゴリー	χ^2の値（除無回答）	χ^2の値（含無回答）
1	M	0.01	——	6	M	0.91	1.04	11	M	11.10***	——
	O	8.76+++	——		O	9.81+++	9.59+++		O	0.22	——
	S	4.92+	——		S	1.52	1.77		S	7.14**	——
2	M	3.75	——	7	M	12.49***	——	12	M	0.96	——
	O	5.01*	——		O	0.54	——		O	23.92***	——
	S	13.29***	——		S	6.83**	——		S	20.28***	——
3	M	8.44***	9.08***	8	M	17.36***	16.88***	13	M	0.01	0.01
	O	1.08	0.93		O	15.27+++	15.96+++		O	3.67	3.56
	S	3.86*	2.95		S	0.01	0.02		S	3.87*	4.54*
4	M	2.35	——	9	M	7.03**	6.80**	14	M	0.07	0.09
	O	1.20	——		S	0.04	0.02		O	0.97	1.09
	S	9.81***	——		O	6.10*	6.49*		S	1.60	1.27
5	M	2.12	2.66	10	M	1.00	——	15	M	0.04	0.02
	O	3.40	3.44		O	0.16	——		O	8.34***	8.66***
	S	0.00	0.04		S	0.19	——		S	6.35*	5.77*

*　+　5％水準有意　$\chi_{.05}^2$ (1)=3.84
**　++　1％　〃　$\chi_{.01}^2$ (1)=6.64
***　+++　0.5％　〃　$\chi_{.005}^2$ (1)=7.88
＊印は仮説を支持する方向で，＋印は仮説を否定する方向で有意な違いの出たことを示す。

O，Sの各カテゴリーごとにそのカテゴリーを選んだ者と選ばなかった者，すなわちそれ以外のカテゴリーを選んだ者との2つに分けて，治療者群と非治療者統制群の回答の分布の違いをχ^2検定した。指示に反してどのカテゴリーの項目も選ばなかった無回答者を全く含めない場合と，そのカテゴリーを選ばなかった者に含めた場合と2通り計算した。その結果がTable

4である。

これによると，問題2のカテゴリーO，S，3のM，S，4のS，7のM，S，8のM，9のM，S，11のM，S，12のO，S，13のS，15のO，Sにおいて治療者群と非治療者統制群の間に本研究の仮説を支持するような統計的に有意な回答の違いがみられる。しかし，問題1のカテゴリーO，S，6のO，8のOにおいては逆に仮説を否定するような統計的に有意な両群の回答の違いがみられる。

問題のタイプ別にみてみるとタイプ1の行動的なものでは4問題中本研究の仮説を支持する結果の出たもの1題，仮説を支持もしないが否定もしない結果の出たもの1題，仮説を否定する逆の結果の出たもの2題。タイプ2の素直さの出てくるものでは同じく仮説支持のもの3題，仮説を支持も否定もしないもの1題，仮説否定のものはなし。タイプ3の怒りのあらわれるものでは仮説支持のもの3題，仮説否定のもの1題。タイプ4の禅仏教に関するものでは3題中仮説支持のもの2題，仮説を支持も否定もしないもの1題となっている。

2.　個々の問題における治療経験年数による治療者の回答の違い

治療者を治療経験10年以上群（N＝30）と治療経験10年未満群（N＝27）の2つのグループに分け，問題によって両群の間に回答の違いがみられるか否かを調べてみた。[15]

両群の回答を問題ごとに整理し，各問題の各カテゴリーの選ばれた度数を表にしたのが Table 5 である。これによると両群の回答のパターンは殆んどの問題において似通っていることがわかる。目立った違いの見られるのは問題1で10年以上群は10年未満群に比べてカテゴリーSの項目を選んだ治療者がきわだって多いこと，問題5で10年以上群はカテゴリーSを，

(15)　治療経験年数が10年以上か10年未満かだけの違いでこのようにグループ分けするのは粗雑の感を免れないかもしれないが今回の調査では他に特に治療の expert と non-expert を分けるよすがとする資料もなかったので両群の人数もほぼ等しくなり，きりのよい経験年数10年で分けることにした。なお治療経験年数の不明な治療者が2名おり，分析の対象から除かれた。

Table 5　治療経験10年以上群と治療経験10年未満群の回答結果

（数字は各項目を選んだ人数を示す）

問題	選択肢番号	カテゴリー	治療経験10年以上群	治療経験10年未満群	問題	選択肢番号	カテゴリー	治療経験10年以上群	治療経験10年未満群	問題	選択肢番号	カテゴリー	治療経験10年以上群	治療経験10年未満群
1	1	O	4	6	6	1	M	10	7	11	1	M	2	4
	2	S	21	11		2	S	14	13		2	O	2	2
	3	M	4	8		3	O	5	6		3	S	26	20
	無回答		0	2		無回答		1	1		無回答		0	1
2	1	S	18	15	7	1	M	3	1	12	1	S	14	9
	2	O	2	1		2	O	10	4		2	O	8	3
	3	M	9	9		3	S	17	20		3	M	8	13
	無回答		0	1		無回答		0	2		無回答		0	2
3	1	O	3	6	8	1	S	2	5	13	1	O	1	1
	2	M	4	3		2	M	2	2		2	M	1	0
	3	S	21	17		3	O	26	20		3	S	25	24
	無回答		2	1		無回答		0	0		既知者		3	2
4	1	M	6	3	9	1	O	10	7		無回答		0	0
	2	S	6	8		2	S	19	15	14	1	S	22	18
	3	O	18	15		3	M	1	4		2	O	7	6
	無回答		0	1		無回答		0	1		3	M	1	2
5	1	S	13	8	10	1	M	1	0		無回答		0	1
	2	O	6	5		2	S	24	21	15	1	O	6	3
	3	M	9	12		3	O	5	6		2	S	20	19
	無回答		2	2		無回答		0	0		3	M	4	4
											無回答		0	1

（注）Table 3 と同じく1題に2項目丸をつけた回答は除いた。

10年未満群はMを最も多く選んでいること，問題12で同じく10年以上群がカテゴリーSを，10年未満群がMを最も多く選んでいることである。

これらの違いをよりくわしく調べるため，治療者群と非治療者統制群の回答の違いを調べたのと同様な方法で，各問題各カテゴリーにおける両群

の回答の分布の違いをχ^2検定した。その結果，統計的に有意な10年以上群と10年未満群の回答の違いがみられたのは問題1のカテゴリーSの項目（5％水準有意）のみであった。この問題のこの項目は治療者群と非治療者統制群の回答の違いを調べた結果では非治療者が治療者より有意に多く選んでいたにもかかわらず，治療経験の多い者が少ない者より有意に多く選んでいるというこの結果は興味深い。問題12のカテゴリーMの項目はχ^2検定の結果，χ^2の値がわずかに小さく統計的には有意にならなかった（$\chi^2=3.71$，5％有意水準は$\chi^2=3.84$）が10年未満群が10年以上群にくらべて多く選ぶ傾向があるといえる。

3.　質問紙の得点化による治療者と非治療者の回答の差

本研究の調査に用いられた質問紙は問題数がさほど多くなく，各問が等質なものかどうかわからない。また項目の内容的妥当性や信頼度に疑問のある問題もある。しかし質問紙の選択肢項目は多少のニュアンスの違いはあれ，一貫してM，O，Sの同じ3つのカテゴリーにあてはまるように作られたものであるという点に鑑みて，全体の傾向をつかむ一応のめやすということで，15問題全部につき回答を得点化してみた。得点は各問への回答を1点とし，選択されたカテゴリーによってM得点，O得点，S得点に分類することにより，被験者各人につき，それぞれO～15点にわたり，合計すると15点になるM，O，Sの3種の得点が得られる。各カテゴリー得点ごとに被験者全員の得点分布表を作成したものが Table 6 である。

Table 6によれば被験者全員の得点分布はM得点とO得点はともに分布の山が小さい得点の方に偏って高くなっているが，S得点は全体になだらかな山型に分布している。

M，O，S 3種の得点に治療者群と非治療者統制群との間で差があるか否か，平均値の差の検定を行なった。片側検定の結果，治療者群と非治療者統制群の平均値の差はM得点においては$t=-5.40$で1％水準有意で本研究の仮説を支持する結果がみられ，O得点においては$t=-0.36$で有意差なしで仮説は支持されず，S得点においては$t=3.79$で1％水準有意で

Table 6　被験者全員の得点分布表

M 得点						O 得点						S 得点					
得点	治療者群	非治療者群			合計	得点	治療者群	非治療者群			合計	得点	治療者群	非治療者群			合計
		統制群	24才未満群	訓練勉強群				統制群	24才未満群	訓練勉強群				統制群	24才未満群	訓練勉強群	
0	6			1	7	0	2	2			4	0					
1	14	4			18	1	5	5	4	1	15	1					
2	8	7			15	2	14	4		2	20	2	1	2			3
3	11	9	2	4	26	3	12	15	3	2	32	3	1	5	2		8
4	11	13	2	2	28	4	3	15	4	1	23	4	3	6	4	3	16
5	3	10	3	4	20	5	10	11	2	2	25	5	5	8	2	1	16
6	3	12	3		18	6	5	5	1	1	12	6	5	7	4	6	22
7	1	4	2		7	7	3	4	1	1	9	7	4	12			16
8		1	2		3	8	1	1		1	3	8	8	6			14
9		2			2	9						9	8	9	2	1	20
10						10	1				1	10	7	4	1		12
11			1		1	11						11	5	1			6
12						12	1				1	12	6				6
13						13						13	1	2			3
14						14						14	1				1
15						15						15	2				2
合計	57	62	15	11	145	合計	57	62	15	11	145	合計	57	62	15	11	145

（注）15題中４題以上に回答しなかった被験者は計算に含めなかった。

仮説は支持された。

4.　治療上の立場・方法の違いによる治療者間でのＳ得点の差

治療者を治療上の立場や方法によりグループ分けして，Ｓ得点に差が見られないかどうか調べてみた。但しＳ得点は項目の内容的妥当性の低い問題８，信頼度の低い問題５，本研究の仮説を否定する結果の出た問題１と６を除いた11題分についての得点を用いた。

治療者に治療上の立場をクライエント中心療法，精神分析，催眠療法，

行動療法，その他の5つに分けて，どれにあたるかをたずねた結果，今回の調査ではクライエント中心療法と答えた者が圧倒的に多く，それ以外と答えた者がごくわずかだったのでグルーピングすることができず，これらの立場による違いを調べることはできなかった。

治療者に治療の具体的方法・形態を個人面接，集団訓練または集団経験，心理判定・診断，その他の4つに分け，それぞれが各自の仕事に占める相対的な比重をたずねたが，その比重づけによって治療者を個人群(N＝19)，集団群（N＝8），個人—集団群[16]（N＝11），判定・診断群（N＝5），その他群（N＝3），オール・ラウンド群（N＝10）の6グループに分け，このうち人数の少ない判定・診断群，その他群を除いた他のすべての群について各群の間にS得点の差があるか否か平均値の差の検定を行なった。その結果，どの対にされた2群の間にも有意差はみられなかった。

個人面接を行なう治療者について，個人面接のタイプを下記のA，Bの2つに分け，各人のあつかうケースにおいてA，Bそれぞれの占める割合をたずね，Aの占める割合の相対的に多い者をA群(N＝12)，Bの占める割合の相対的に多い者をB群（N＝26）と分けて両群のS得点に差があるか否か平均値の差の検定を行なった。結果は有意差がみられなかった。

A．相談に来た人が比較的よく適応した人で，問題が知識・経験の不足などから来る外部的な問題で，カウンセラーが適切な助言・指導を与えればよい場合。

B．相談に来た人が深く自己の内面の問題に悩み，長く相談の回数を重ねるうちに徐々に緊張がほぐれ，自己についての洞察を得るようになる場合。

5.　宗教との関係

本研究であつかわれている問題は宗教的態度，特に禅仏教と関連していると思われたので，それとの関係を調べるために被験者全員に宗教に関する質問を行なった。その結果から被験者全員を信仰を持つ者（N＝51）と

(16)　個人面接と集団訓練・経験の両方にほぼ半々ずつ比重づけしたグループ。

持たぬ者（N＝88）の2群に分けて質問紙の15題全部について両群のS得点の平均値の差を検定してみたところ，有意差はみられなかった。また禅の理解の度合について，「よく理解している」から「理解していない」までの4段階にわたる被験者の自己評定と問題13〜15の禅仏教の問題3題のS得点とがどのように関係しているかについて検討したが，質問のし方に問題があったのか，特に明瞭な関係は見出せなかった。

6.　O得点と Porter のテスト

本調査の質問紙は形式的には前述の Porter のテストに似ており，カテゴリーOの項目は問題によっては Porter のテストにおける理解的態度に一見似通っているものもあるため，高いO得点を得た治療者の被験者はあるいは Porter のテストの影響を受けたかもしれないと思われたので，治療者の被験者のうち Porter のテストを知らなかった者（N＝21）とこのテストを知っており，かつ回答の際にそれを思い出した者（N＝16）について，両群の15題全部についてのO得点の平均値の差を検定した。結果は有意差は見られなかったが，O得点がきわだって高い上位3名の治療者は，全員 Porter のテストを知っており，回答の際にそれを思い出したと答えている。

考　　察

1.　本研究の仮説について

治療者は非治療者にくらべて自然反応型の項目をより多く選ぶであろうという本研究の仮説の自然反応型に関する部分については，問題ごとに治療者と非治療者の回答の分布の違いを調べた結果，15題中9題において仮説支持の結果が見られ，仮説否定の結果の出た問題1も治療経験年数の多い治療者が少ない治療者よりもSの項目を有意に多く選んでいること，質問紙の得点化による治療者と非治療者のS得点の差の t 検定においても仮説支持の結果が出，またS得点は信頼性も高く，弁別力もすぐれていることから本研究の仮説は証明されたといえる。

仮説の道徳規範型に関する部分については，問題ごとに治療者と非治療者の回答の違いを調べた結果，15題中5題において仮説支持の結果がみられ，仮説否定の結果の出た問題はなかった。またM得点の差の t 検定においても仮説支持の結果が出ている。しかし，仮説支持の結果の出た問題の中には項目の内容的妥当性の非常に低い問題8も含まれており，質問紙全体でもM項目の内容的妥当性の判定結果は大変良いとはいえず，M得点の信頼性は他得点より低い。また問題別に見た結果では仮説を支持しているのは5題のみであるのに，M得点の t 検定の t の値がS得点の場合よりも大きいこと，M得点の得点分布表において得点の小さい方へ分布の山が高く偏っていることなどから，治療者と非治療者のM項目における回答の違いはS項目の場合のように質問紙全体において比較的一貫した傾向というより，いくつかの一部の問題における著しい違いとしてとらえておくのが適切であろう。道徳・規範型に関しては以上のような問題点が残されてはいるものの一応本研究の仮説は証明されたと言ってよいであろう。

仮説の客観的理解型に関する部分については本研究の結果からは証明されなかった。問題ごとに治療者と非治療者の回答の違いをみた結果，仮説支持と仮説否定の結果が同じく3題ずつ出ている。O得点の t 検定に有意差があらわれなかったのはこの相反する二つの傾向が相殺された当然の結果といえる。したがって個々の問題に立ち戻ってどのような問題で仮説が支持され，どのような問題で否定されたのかを検討する必要がある。

仮説支持の問題は本研究の前提からすればそうなってしかるべきもので前提の正しさを証明するものと考えられるが，仮説否定の問題1，6，8はその前提が通用しなかったわけであるから，何故通用しなかったかその理由を明らかにせねばならない。筆者の推察では問題1は治療者がO項目を Porter の理解的態度と受取って多く選んだのではないかと思われる。治療者の知識からくる先入見がこの場面における共感的理解と客観的理解の区別を妨げたのではなかろうか。問題6はO項目が少女の自己洞察をあらわす言葉のように受取れるので治療者が多く選んだと思われる。問題8

は内容的妥当性の判定結果が良くないので治療者が客観的理解型の項目を多く選んだと考えるのは早計で，治療者の多く選んだ項目の内容が実際は何なのか白紙に戻って検討しなおすべきであろう。ここではそれは省略する。

客観的理解型において仮説支持の結果が出なかったことについて，個々の問題を離れて一般的な理由として考えられることは，本研究の治療者の被験者の多くは学術研究や専門的高等教育にも携わる人々なので，職業柄知的，客観的な態度で物事に接する傾向があるのではないかとも考えられ，あるいはそのような傾向が治療者の被験者をしてO項目を多く選ばせる結果となったかもしれない。

以上のようにカテゴリーによってそれぞれいくつかの問題点はあるものの今回の調査の結果に関する限りでは本研究の仮説は大筋において立証されたといってよいであろう。特に自然反応型の項目において良い結果が得られたことは質問紙が第一義的には自然反応型の行動についての態度をはかることを目的としているのであり，道徳・規範型や客観的理解型は付随的にはかられたものであることを鑑みる時，満足すべき結果といえよう。

2. 質問紙について

本研究において自然反応型と名付けられたカテゴリーは Porter の提示した理解的態度と同様，治療というもののあり方をとらえようとする一つの新たな視角であり仮説であるが，これをとらえる用具として構成された本研究の質問紙はどの程度その目的にかない得たであろうか，その制約点は何か，またもし今後改善できる点があるならばそれは何かについての考察を次に試みる。[17]

すでに繰返し述べてきたように，本研究の調査において自然反応型の項目においてよい結果が得られ，また得点化するとS得点の弁別力が他得点に比べて優れているということは質問紙が本来自然反応型の行動のし方についての態度を調べるべく作られたため，ある程度当然ともいえる。S得

(17) APPENDIX 2 もあわせて参照されたい。

点は信頼性も高く，項目の内容的妥当性もいくつか疑問のある問題はあるものの全体としてはそう悪いとはいえない。質問紙全体の妥当性は今回の調査では検討できなかったのでそこに大きな疑問は残るが，本研究の質問紙は自然反応型の行動のし方についての態度をとらえるのにある程度成功したといってよいと思う。多少手直しを加えれば大ざっぱではあるが自然反応型の態度をとらえる一つの尺度として役立ち得ると思われる。

一方，道徳・規範型と客観的理解型はもともと自然反応型に対照するものとの意味で作られ，付随的に測られたものであっただけに，今回の調査においても自然反応型ほど明快な結果は得られず，両得点とも弁別力に乏しく，道徳・規範型は項目の内容的妥当性もかんばしいとはいえず信頼性も他に比べて低かった。道徳・規範型と客観的理解型は本質問紙においてはその本来の役柄通り各問題において自然反応型と対照して解釈されるのが適切であると思われる。それぞれを独立の尺度として利用できるようにするには質問紙の大幅な改定が必要であり，それはおそらく全く新たな質問紙を作るのと同じ手間になるであろう。またそのようなことは本研究の目的からははずれることである。

本研究においては治療者の治療経験，立場，方法の違いによる治療者間での差異をとらえることは殆んどできなかったが，今回の調査はもともと治療者間の差異をとらえることを意図的な目標としていたわけではないので，可能な治療者のグルーピングのし方が限られてしまい，今回の結果だけから治療者間の差異について結論を出すことはできない。しかし，本質問紙の扱っているのは治療の技術的なことや専門的なことではなく，ごく一般的な態度なので，治療上の立場や方法の細かな差異によってそう大きな違いは出てこないように思われる。

本質問紙の扱っている態度と宗教との関係も，今回は被験者の宗教について大ざっぱにしかとらえなかったので，明らかにすることができなかったが，もし本研究の問題にしている態度が究極のところで宗教的態度とつながっているとしても，具体的に質問紙にあらわれる場面は禅仏教は別と

していわゆる宗教，信仰とは余りにも縁のうすいものなので，本質問紙を用いて宗教に関する研究を試みても実り少ないものとならざるを得ないであろう。

以上みてきたごとく，本研究の質問紙はただ一つ，自然反応型の態度をとらえる尺度としてはある程度役立ち得るものと思われるが，たびたび述べたように問題数が少なく，問題の等質性にも疑問があるので，態度尺度として決して精密なものとはいえない。本質問紙は一つの大ざっぱな態度の指標となり得るだけで，質問紙の回答の得点化もグループ間の比較にはともかく，個人の態度の得点化のような用い方には不適当と思われる。むしろ本質問紙は Porter のテストがそうであったように，心理治療者の道を志して勉強している人に学習のある段階で治療のあり方をとらえる一つの視点を提示し，治療についての理解を補助する道具として啓発的な用途に役立ち得るのではないかと考えられる。本質問紙へ回答を試みて，自分の回答と治療者の回答を比較することが治療についての理解の一つの手がかりを与えるのではなかろうか。

今後本質問紙を用いて研究を行なうとすれば質問紙を現在の形のまま用いるのは得策でないことは明らかである。研究の目的によって多少異なることはあろうが，現在のままで一応今後の使用に耐え得るのは問題2，3，7，9，11，13，15であろう。問題12も多少手直しを加えればよい問題となるであろう。

3. 今後の問題とまとめ

本研究は自然反応型と名付けられた行動のし方の記述からはじまり，そのような行動についての心理治療者の態度を質問紙を用いて調査したわけであるが，この方法には当然数々の問題点が残されている。

まず自然反応型のカテゴリー記述は注にも述べたように表現の適切でないところや説明不十分なところがあり，誤解を招きやすいという意味で問題があったようである。質問紙のS項目とカテゴリーSの記述をくらべてみて多少“ずれ”を感じた人がいても不思議ではない。特に記述を一見す

ると「解決しようとすら思わず」とか「感情のままに」という表現ばかり強く目にうつり，「その場に起りつつあることを敏感に感じとり」という部分は見過されやすい，今後この記述はより適切で精粋なものに改める必要があろう。

また自然反応型の行動はカテゴリー記述を見てもわかるようにいろいろな意味を含んでいる。それらを十把一からげにして具体的場面における一つの行動で代表させるという今回の質問紙の方法には多少無理があったようである。本研究は質問紙の構成自体が一つの重要な目的であったのでやむを得なかったが，今後自然反応型の行動についての探究を深めようとするならば Gendlin が体験過程の研究において体験過程を操作的に扱う操作変数を導き出してそれらを個々に研究しているように，自然反応型の行動をいくつかの要素にわけてそのそれぞれにつき検討する方が有意義な結果を生むと思われる。

今回の調査の一番の問題点は研究上のさまざまな制約のために質問紙のみの調査しか行なえなかったことである。質問紙と並行して被験者の自然反応型の態度を実際に何らかの形でチェックするということまでは手が及ばなかった。これは質問紙がどこまで実際の態度をとらえることができるかという質問紙の妥当性の問題もかかわってくるわけで今後の検討，探究が切に望まれる点である。

このように様々な問題点，制約点を残してはいるものの本研究の結果から見る限りにおいては心理治療者が前述の人間観を持っているということはある程度確かめられたといえる。このことから治療がこの人間観にあるようなし方で起こるのではないかと考えることは可能である。この点について確かめるには Rogers や Gendlin の研究にならって治療場面におけるクライエントの変化や治療過程についての吟味，研究が必要であろう。微妙で取扱いの困難な問題であるだけに，それを実行することの難しさは想像にかたくないが，筆者らはこの方面における今後の研究の発展を期待するものである。

文　献

Gendlin, E. T., Genny, R. H. and Shlien, J. M. 1960. Counselor ratings of process and outcome in client-centered therapy. *J. clin. Psychol.*, 16, 2, 210-213

Gendlin, E. T. and Shlien, J. M. 1961. Immediacy in time attitudes before and after time-limited psychotherapy. *J. clin. Psychol.*, 17, 67-72

伊東博　1963　カウンセリング　東京　誠信書房

Porter, E. H. 1950. *An Introduction to Therapeutic Counseling*, New York, Houghton Mifflin Co.

Rogers, C. R. and Rablen, R. A. 1958. A scale of process in psychotherapy. *Psychiatric Institute Bulletin*, Univ. of Wisconsin（伊東博編訳 1966　サイコセラピィの過程に訳出）

佐々木由利子　1972　問題状況における行動のし方に関する心理治療者の態度について　国際基督教大学　修論

Walker, A. M., Rablen, R. A. and Rogers, C. R. 1960. Development of a scale to measure process changes in psychotherapy. *J. clin. Psychol.*, 16, 1, 79-85

〔付記〕　本研究の実施に当り，調査にご協力くださいました日本カウンセリング協会と池田由美子さん，織部靖史さん，本論文発表にあたり終始暖かい励ましをくださいました国立精神衛生研究所の山本和郎先生，最後に被験者になってくださいました一人一人の皆様に，心より感謝申し上げます。

APPENDIX 1

問題状況における行動のし方に関する質問紙

この質問紙は，人が，人生において生ずるさまざまな問題にぶつかった時，どのような行動をとれば，問題をよい方向に解決できると思うかについての人々の考え方を調査するためにつくられたものです。あなた個人のことを調べるためのものではありません。しかし質問にはあなた自身の考えにしたがって回答してください。決してほかの人と相談しないでください。

つぎにでてくる15の物語には人が問題に直面した状況がのべられていま

す。そのあとにでてくる1～3の項目はこの問題状況の当事者のとりうる三つの行動をしるしたものです。あなたはそれぞれの問題の当事者に問題をよい方向に解決するために，どの行動をとってほしいと思いますか。それぞれの場合について，1～3の中では，あなたが当事者にもっともこうしてほしいと思う項目を必ず一つ選んで，別紙の回答欄の該当番号を丸でかこんでください。どの答が正しく，どの答が誤りというものではありません。自由に自分の思い通り選んで下さい。

なお，15の物語は一つ一つ独立したものです。

1

Pさんは人の気持に鈍感で，話をすぐ脱線させたりピントのぼけたひとりよがりなおしゃべりばかりする。このためクラブの他のメンバーからうるさがられ，皆から相手にされなくなりだした。皆が相手にしてくれないことを常々不満に思っていたPさんは，ある日クラブの会合のとき，ふとしたきっかけから自分の不満をぶちまけることになった。それに対して他のメンバーは皆，異口同音に，Pさんはひとりよがりで人の気持がわからないと言い，Pさんは逆に皆からさんざんたたかれるはめにおちいった。Pさんの問題が出たためクラブの他の重要な話し合いが後回しになったので，会合が長びき，話し合いが大方すんだ時には，時刻は予定を2時間も遅れ，夜10時をまわっていた。女子のメンバーも2人程いて，帰り道のことを心配していた。Pさんは会合の間中，先程皆に人の気持がわからないとたたかれたことについて考えており，話し合いにもうわの空だった。最後の重要な議題についての話し合いがちょうどすんだところからが次の会話である。

クラブ長：「それでは皆さん，他に異論もないようですので，この件について只今決められた方針にしたがって今後の活動をすすめてゆきたいと思います。それでは時間も大分遅くなりましたので，きょうはこのへんで解散にしたいと思います。ご苦労さまでした。女の人達，帰り道大丈夫かな。誰か送ってやれる人はいな

いかな。」

Pさん：「あっ，その前にちょっと……。先程皆さんに人の気持がわからないと言われて，そのことを話し合いの間中ずっと考えていたんですけれど，人の気持がわからないっていうのはどういうことかもう少しくわしく教えてもらえないでしょうか。」

クラブ長：「それだからあなたは人の気持がわからないっていうんですよ！」

Pさんはしょっぱなからクラブ長にしかりつけられてしまいました。ここであなたはPさんにどういう行動をとってほしいですか？　次の3つのうちから最もこうしてほしいと思うものを一つ選んでください。

1. 「クラブ長は私が話し合いもまじめにきかず，夜も遅いので帰りたがっておられる皆さんの気持も考えずおききしたことを怒っていらっしゃるのですね。」と言う。
2. 「あっそうか！　またやってしまった。すみません。つい自分のことに夢中になって……。もうきょうは遅いから，これで終りにしましょう。」と言う。
3. 「お気を悪くさせたのでしたらすみませんでした。そんなつもりではなかったのですが……，あやまります。皆さんがきょうはもう話し合いたくないと思っておられるのなら，私もあえてとは申しません。」と言う。

2

Tさんは大変信心深く，まがったことが大嫌いで，その道徳的な潔癖さは少し度が過ぎる程だった。Tさんは人生を享楽したり，お金を浪費したりすることは罪悪と考え，人間はただまじめに課せられた仕事を果し，世のためにつくすことが人の生きる道であると信じていた。Tさんの妻はTさんの潔癖さは度が過ぎていて聖者と暮しているようで息がつまりそうになる時があるとこぼしていた。

ある日のことTさんの妻の内職先の創業30周年記念に，彼女がいつも良

い仕事をするというので賞金が出た。ちょうどTさんの誕生日もめぐってきたところだったので，妻は両方のお祝いをかねてTさんをびっくりさせて喜ばせようと，内緒で賞金をはたいてプレゼントとご馳走を用意し，当日の夕方部屋を美しく飾りつけてTさんの帰りを待った。プレゼントはTさんが前から店のショーウィンドーをのぞきこんでは「きれいだなあ。」とため息をついていた金の懐中時計だった。

ところが帰ってきたTさんは部屋の中を見まわして「何の騒ぎだ？」と不きげんな顔をしてたずね，妻の「あなたの誕生パーティよ。」との答に格別うれしそうな顔もせず，「ああ，そうか」と言ったきり食卓にすわりこんだ。妻がつとめて陽気に「あなたへのプレゼントよ」と時計の箱をわたすと，無雑作に受取って包みを開いた。中の時計を見たとたんにTさんは怒り出し，「何故こんなぜいたくなものを買った。金時計なんかに無駄づかいするお金があったら社会事業か施設にでも寄付した方がよっぽどましだ。いますぐいって返してこい！」とどなりつけたまま，妻のいいわけには耳もかさず自分の部屋に入って戸を閉めてしまった。

Tさんのこのような態度に，今迄のうっ積が一挙に爆発して妻は「もう我慢できない。あなたは人間じゃないわ。神さまか，でなかったら鬼だわ！」と泣き叫んで，2人の子供を残したまま家をとび出して実家に帰ってしまった。

2人の子供をかかえてTさんが困りきって妻の実家へたずねてゆき，妻に帰ってくれるように頼むと妻は「時にはぜいたくをしたり遊んだりしたがる私のような凡人は，あなたのような神さまの妻としてふさわしくありませんわ。」と言って，いくら頼んでもとりあってくれない。Tさんは途方にくれてしまった。

ここであなたはTさんにどうしてほしいですか？

1. 「お前がいないんでわたしは本当に困ってしまった。2人の子供は泣くし，仕事は手につかず，途方にくれているんだ。わしはお前の言うような神さまどころか，おまえがいなくてはやっていけないんだよ。」と

言う。

2. 「お前は時にはぜいたくをしたり遊んだりして人生を楽しみたいと思うのに，わしはそういうことを罪悪だと思っているので，そういう2人の考え方の違いが問題になるわけだ。そういう場合にはお互いに妥協していくしかないんじゃないかな。」と言う。

3. 「わしが余り潔癖すぎておまえに息のつまるような思いをさせたのはたしかに悪かった。あやまるよ。これからはわしも気をつけるようにするよ。でももう家をとびだしたりしないでくれよ。子供達がかわいそうだ。」と言う。

3

Aさんは後妻で，子供は夫が前の妻との間にもうけた高校生になる娘B子だけだった。AさんとB子の間はなんとなくしっくりいかない。AさんはB子が自分の本当の子でないので気をつかって言いたいことも言えずにいると，B子はますます図に乗ってわがままのし放題をするのだった。Aさんの夫は自分の子じゃないからと遠慮せず厳しくしたらいいと言う。Aさんも理くつでは夫の言う通りだと思うが実際にはなかなかうまくいかない。

ある日Aさんは外に用事があって，B子に留守中に急ぎの用を片付けておいてくれるように頼んででかけた。Aさんが外から帰ってくるとB子に頼んだ用事がすましていない。B子の部屋へ行くとB子は寝そべって雑誌を読んでいた。Aさんが「頼んだ用事はどうしたの？」と聞いてもB子は返事もせず，寝そべったまま雑誌から目をはなさない。Aさんがここでひきさがってはならじと重ねて追及すると，いかにもうるさいわねえといった調子で顔をしかめ，やおらポケットから煙草をとり出して火をつけた。AさんはB子が煙草をのむのを見るのはこれがはじめてだった。

Aさんが本当にB子のことを心配しているのだったら，あなたはここでAさんにどうしてほしいですか？

1. 「B子，煙草なんかのんでいるの？　煙草は体によくないわよ。新聞

やテレビなどでよく言われているでしょ。煙草をのみつづけていると肺ガンになって死ぬ率が高いって……。」と言う。

2. 「B子，高校生の娘が煙草なんかすってはいけません！　あなたは女の子だし，まだ未成年しょう。」と厳しく注意する。

3. 「B子，おかあさんの言っていることまじめに聞いているの？　煙草なんかすうのやめてこっちをおむきなさい！」と怒る。

4

自分のことを大変ものわかりのよい話せる父親だと自負している父親がいた。中学生になる子供達とも時々一緒に遊んであげるし，時には家族そろって旅行につれていってあげることもあった。ところがある日曜日のこと，息子のところに友達が来て，となりの部屋で二人が話しているのを聞くとはなしに聞いてしまって非常にショックを受けた。自分の息子が友達の「きみのおとうさんは話せるからうらやましいな。」と言うのに答えて，「そうでもないんだよ。うちのおやじって相当ひとりよがりで，ひとりでいいおやじぶりたがるから，僕たちの方で調子を合わせているんだ。時々行く旅行だっておやじの自己満足で連れて行きたがるからおつきあいするけれど，本当は大して行きたくもないんだ。でもおやじは話せる父親のつもりでいるから割合ぼくたちに甘くていいこともあるよ。だけどやはり本当はちょっともの足りないな。」と言っているのを聞いてしまったからである。この父親は自分が子供の本当の気持をよく理解していなかったということを深く反省した。

それからしばらくしたある日のこと，子供達がまだ小さかった頃，病身だった母親のかわりとして大変お世話になったおばさんが病に倒れ，不治の病で先も長くなさそうだとの話に，病院にお見舞にでかけることになった。子供達に一緒に行こうと声をかけると，それぞれ好きなテレビ番組があるからとかもうすぐ試験だからとか言ってぐずぐずしている。「しかし場合が場合だから……。」とさらにうながしても子供達はぶつぶつ文句を言っていていっこうに腰をあげようとしない。子供達も一緒に行くとばか

り思っていた父親は，子供達のこの態度にちょっとびっくりしてしまった。

あなたはここでこの父親にどうしてほしいですか？

1. 「おまえたち小さい頃ずい分おばさんのお世話になっただろう？　そのおばさんが病気で死ぬかもしれないというのにお見舞にも行かないなんて恩知らずのすることだよ。こんな時ぐらい一緒にお見舞にいかなければ申し訳ないじゃないか。今日は行かなくてはだめだ！」と言う。
2. 「おまえ達，それでは本当にお見舞には行かないというんだね？　昔あんなにお世話になったおばさんが不治の病に死にかけているというのに……！　おまえたちがそんな薄情な人間だったかと思うと，とうさんは悲しいよ。」と言う。
3. 「そうか，おまえたちもいろいろ忙しいんだな。でもきいた話によるとおばさんの病気は不治の病でもう1か月はもつまいということだ。きょうお見舞に行かなければ，おまえたち，永遠におばさんに会う機会を逸してしまうことになるかも知れないな。おばさんも会いたがっていると思うがね。」と言う。

5

幼い頃はおとうさん子で育ったのに長じてからは父親との仲がうまくいかない中学生の少年がいた。父親は少年が強情で素直でないと言う。少年は実は父親が好きで甘えたい気持もあるのだが，父親の前に出るとてれくささもあって，かえって反抗的なすねたふるまいをしてしまう。一方父親はそんな息子にへきえきしてか少年のことを余りかまわず放っておくので，少年は父親に相手にしてもらえないさびしさからますますふてくされたふるまいをしてしまうのだった。

ある日少年の学校から家に，少年が試験中にたびたびカンニングをし，注意してもなおらないので親からも注意してほしいという連絡が来た。父親は「それくらいのこと，あの年頃にはいたずら半分によくやるよ。」と，どうでもいいという態度だったが，母親が説教してくれとやいやい言うので説教することになった。父親が気をつかっていたわるように話しかける

のに少年は全く耳をかそうとせず，相変らずのふてくされぶりである。少年の不まじめな態度に父親も腹が立ってきたらしく声を荒立てたが少年はそっぽを向いたままである。父親はとうとう「ひとの話をもっとまじめにきけ！」と言いざま少年の横つらをはりとばした。思わぬ一撃に畳の上に横倒れになった少年は，頬をおさえて起きあがりながら父親の顔をまじまじと見つめた。

今まで父親と心のつながりが持てないでいたこの少年に，あなたはここでどうしてほしいですか？

1. 泣き笑いしながら「僕，おとうさんにこういうふうにひっぱたいてもらいたかったんだ。」と言う。
2. 「僕は本当はおとうさんに甘えたいのに，おとうさんがあまりかまってくれないからふてくされるし，僕がふてくされるからおとうさんはますますかまってくれない。二人の間は悪循環なんだ。」と言う。
3. 「すみません。僕が悪かったんです。自分で悪いことしたのに，それを叱るおとうさんにたてついたりしてすみませんでした。でもおとうさんがいつも僕のことかまってくれないものだから，つい反抗したくなって……。」と言う。

6

E子はひとり娘で，両親に甘やかされて育ったので，多少自己中心的で人に対して思いやりに欠けるところがあった。彼女は時々母親からそのことについて小言を言われていた。ある日E子が家でテレビを見ている時，母親が近所のスーパーマーケットに買物に出かけた。やがて急に空が曇ってにわか雨がふりだした。E子はちらと買物に行った母のことを思い浮べたが，見ているテレビ映画がクライマックスにさしかかったところだったので横着を決めこんでテレビをそのまま見続けた。しばらくして傘もなく全身ずぶぬれになって帰ってきた母親は「どうして迎えに来てくれなかったの？　来てくれると思ってしばらくマーケットで待っていたのに。」とE子に言い，E子がテレビを見ていたことを知ると母親はつくづく情ない

といった様子でE子を思いやりがなく利己主義だとさんざん叱りつけた。E子もしゅんとしてうなだれてきいていた。

母親の怒りも鎮まりかけた頃，デパートから荷物が届いて母親は玄関に出ていった。ひとり残されたE子は悪いことをしてしまったという後悔と自責の念に強くおそわれて，二度とこんなことはすまい，心をいれかえて思いやりのある子になろうと心の中で誓った。ちょうどそこへ母親が雨のしずくが玉のようについた細長いビニール包装の荷物をかかえて，「E子のために買った本箱が届いたわよ。」と言いながら部屋へ入ってきた。母親はにこにこしながら「E子のほしがっていた彫刻のついた組立て式の最上等の品よ。」と言った。

ここであなたはE子にどうしてほしいですか？

1. 「おかあさん，私いまおかあさんのいない間に反省したの。私おかあさんに本当に悪いことをしたと思います。ごめんなさい。これからはおかあさんをきょうみたいに悲しませたりしない，良い子になるようにするわ。」と言う。
2. いそいで台所へとんでゆき，乾いたぞうきんを持ってくる。
3. 「その本箱はデパートの売場の中でも一番高かったの。それを買うにはおかあさんずい分無理したことでしょうね。おかあさんがこれほど私のことを思ってくださるのに，私本当に親不孝だったわ。」と言う。

7

田舎の学校を卒業してから東京のおじさんの店に見習いとして住み込んでいる少年がいた。少年の田舎の両親からくれぐれもよろしくと少年の将来を託された昔気質のおじさんは，少年を立派に育てあげ自分の店の跡つぎにしようと厳しくしこんだが，少年はおじさんの目が届かないと怠けたりごまかしたりする癖がなおらなかった。少年は大して悪気はなく，しかるといつもすぐ素直に謝るのだが，すぐまた元に戻ってしまう。しかし今の仕事が不満だとか，おじさんのやり方が気にいらないわけでもなかった。むしろ自分の悪いのを認めてさえいたが，悪い癖はやまなかった。そんな

少年を歯がゆく思うおじさんは，「叱るわしの気持をあの子がわかってくれるといいんだが。」といつも言っていた。

ある日少年はおじさんに口をすっぱくして注意されたばかりだったのに，おつかいの帰りにまた怠けてパチンコ屋に寄ったりして遊んでいるうちに，お客さんから預った5万円をどこかに落してしまった。おじさんにも連絡し二人でお金を捜し歩いたがとうとう発見できず，おじさんが弁償することになった。おじさんは今度こそ本当に腹を立て，少年を前に，口先だけでなく心の底から反省するまでは許さないと激しく叱った。少年がいつものように謝れば謝る程おじさんはいよいよ激しく怒るばかりだった。

おじさん：「あやまってなんかほしくないよ。おまえは注意されるといつもすみませんすみませんと簡単に謝ってそれきりだったんだ。お前はただ怒られまいとするだけで，自分で自分に責任をとろうとしないんだ。わしはおまえが憎くて叱るんじゃないんだよ。そんな子供みたいなおまえを見るのが悲しいからなんだ。」

少　　年：「ぼくがここにいるとおじさんに迷惑をかけるばかりだからお店をやめさせてください。」

おじさん：「まだそんなばかを言ってるのか！　おまえにはどうしてわしの気持がわからないんだ？　店をやめたら責任がとれると思っているのか？　つくづく情けないねえ，おまえってやつは……！」

少　　年：「そうなんです。僕ってほんとにだめなんだ。お店にいたっておじさんの迷惑になるばかりなんだ。僕なんかいない方がいいんです。」

おじさん：「甘ったれるのもいいかげんにしろ！　おまえはわしがおまえのことを迷惑がっているとでも思っているのか？　それ程水くさいと思っているのか？　だからわしの気持がわからないっていうんだ。いいか，おまえがやめるったってやめさせやしないよ。おまえが自分のことに責任をとれるようになるまではな！

そのかわり容赦はしないからな！」

あなたはここでこの少年にどうしてほしいですか？

1. 「こんなに僕のことを気づかってくださるおじさんにご迷惑をかけて本当にすみませんでした。これからは心をいれかえてまじめに働きます。なくしたお金も働いて返します。」と言う。
2. 「おじさんは僕のことを憎く思って怒っているんじゃなくて僕に立派な一人前の人間に育ってほしいと思って怒っているんですね。」と言う。
3. 「おじさん，そんなに僕のことを思ってくれているんですか。ありがとう。」と思わず涙をこぼす。

8

ＬとＭはある困難な仕事をする為につくられたチームのメンバーだった。このチームでは仕事を進めていく上でメンバー全員の何事につけても心おきない意見の交換と，気心のぴったりと一致したチームワークが何よりも重要であった。ある日Ｌのところへ Ｍがたずねてきた。Ｍは愉快で陽気な性格で，チームの誰からも親しまれたが，ときどき仕事の方をおろそかにするので皆が迷惑することがあり，団長からしばしば注意を受けていた。ＬがＭの話を聞くと，「きょうとうとう団長からチームのメンバーからはずす旨の通知があってすっかりあわててしまった。これで目がさめたので今後はまじめに働きたいと思うから団長に とりなしてほしい。」と言う。ＬがＭにいろいろ深くたずねた結果，Ｍの反省は本物で今度は責任をもって仕事をしてくれると確信がもてたので，翌日二人そろって団長のもとへ出かけた。Ｍは団長に幾度もわび，ＬもＭのことをいろいろとりなした。ところがそばに日頃からＭをあまり心よく思っていなかったメンバーのＯがいて，Ｍのことをくさしはじめた。

Ｏ：「これからはまじめに仕事しますなんて殊勝らしく言ってるけれど，どこまで本当だか。これまでだっておれたちずい分迷惑したんだぜ。今迄も何度も注意うけたんだろう？　今度だっていつまで続くものか。どうせまたさぼるに決まってるんだ。」

M：　「いやそんなことはありません。今度こそ心を入れかえました。もしチームにもどしてもらえるなら一生けんめい仕事します。」

O：「うそつけ！いつも調子のいいことばかり言ってこの大うそつきめ！団長さんこんなやつの言うこと信用しない方がいいですよ。L君，きみもだまされているんだよ。」

Lがまあまあととりなすのもきかず，OのMへの悪口雑言はますますはげしくなるばかりだ。しかしチームになんとか帰りたい一心のMは泣き出しそうな顔をしながらもこらえてがんばっている。団長はOは少し言いすぎだとは思いながらもMが今後まじめにやってくれるかどうかまだ半信半疑なので，OとMの二人の間に口を出しかねているようだ。しかし二人のようすは見るに見かねるばかりになってきた。

LがMのことを信じてMがチームにもどるのが一番よいと考えているのだったら，あなたはここでにどうしてほしいですか？

1. 「O君，ちょっと待ってくれ。きみM君のことをひどく言いすぎているよ。M君が心をいれかえてでなおそうとこんなに一生けん命になっているのにかわいそうじゃないか！　ぼくは彼はまじめにやってくれると思う！」と言う。
2. 「O君，まあそうつよく言わなくてもいいじゃないか。M君も悪かったかもしれないけれど，今はこうして反省して謝っているのだし，M君も今度のことでは大分ショックを受けているのだから，これ以上言うのは酷というものだよ。もうこのへんで許してあげたまえよ。」と言う。
3. 「いままでのいきさつからすればO君がそう言うのも無理はないが，きのうM君はうちへ来て3時間も涙を流さんばかりにして反省していったんだ。それからすればMはまじめにやってくれると信じてもいいと私は思うんだが。」と言う。

9

恋人の自分に対する態度がどうも最近冷たくなってきたと悩んでいる青年がいた。お互いあまりよく知らないうちは彼女もずい分気のあるそぶり

を見せていたのに，だんだん二人でデートを重ねるうちに次第に彼女の態度がそっけなくなってきたように思われる。青年はその原因がわからず，考えあぐねて，二人のことをよく知っている友達に事情をうちあけて，彼女の青年に対する気持をさりげなく聞きだしてもらうことにした。その結果わかったのは彼女は彼のことを次のように言っているという。「彼はものたりない。映画を見るのにどれにしましょうと言うと，どれでもいいと言うし，映画を見終ったあと感想をきいてもまあまあよかったねの一言きりだし，ピクニックに心をこめてお弁当を作っていっても，おいしいともまずいとも言ってくれないし，ときどき腹立ちまぎれに無理な注文をしてもああきみのいいようでいいよと言うし，いよいよしゃくにさわって皮肉を言うと少しも感じないでまともな返事をかえしてくるのでいやになってしまう。」と。

その次のデートの日，彼が約束の場にでかけてゆくと，彼女はしかつめらしい顔をしてすわっており，彼が隣りにすわるや否や，「もう，きょうでおつきあいはやめにしたい。」と言う。どうしてかと聞くと彼女は「今まで黙っていたけれど，あなたのほかにもう一人つきあっている男性がいて，どちらかというとその人の方に心をひかれるので，あなたとのおつきあいはこれまでにしたい。」と言う。それは口実で，ほかに別れたい理由はあるのではないかと追及すると，いや，いまお話しした通りだととりつくしまもないそっけない返事である。さらに念を押したが彼女の答はかわらない。

恋人を失うか否かの瀬戸際に立たされたこの青年に，あなたはここでどうしてほしいですか？

1. 「きみは僕と別れたいのは，もうひとりのつきあっている男性の方に心がひかれるからだと言っているけれど，僕はやはり，きみは僕がいつも自分の意見をはっきり言わないのを物足りなく思ってわかれようとしているんだと，そう思うな。そうだろう？」と言う。
2. 「きみはなんてひどい人だ！僕はきょうまできみをたった一人の恋人

と思ってつきあってきたんだ。それなのにきみは僕に隠れてほかの人ともつきあっていて，僕よりもその人の方がよくなってきたから別れてくれなんて，よくも平気で言えるな！　きみはそんなことを言っても僕は怒らないと思ったのだろう。僕は木や石じゃないんだぞ！」と怒る。

3.　「きみがこれ以上僕とつきあいたくないというのなら無理につきあってくれとは言えないけれど，僕が思うにきみのように二人の人間をはかりにかけてこっちの方がいいからこっちを選ぶなんて，そんなことをするのはいけないよ，人と人とのつきあいにおいてすべきことじゃないよ。」と言う。

10

適令期の若い男女が友達の紹介で交際をはじめた。互いに相手を好もしく思っているのだが，二人共恥ずかしがりやなのでうまく愛情を表現できずじれったく思っている。女性の方が紹介してくれた友達に「彼がもっと積極的にでてくれればいいんだけど……。」と相談をもちかけると，友達は「彼もとてもてれやだから愛情を表現したいと思ってもうまくできなくて困っているんじゃない？　あなたも彼のそういう気持をくんであげて，自分の方からも愛情を表現してあげなくちゃ……。彼があなたに好意を持っていることは確かなのだから。」と言う。彼女はなるほどその通りだと思った。

次のデートの時，二人は木のこんもりと茂った庭園を並んで散歩していた。二人の前方少し離れたところをヒッピー風の若い男女がこの二人とは対照的にしごく仲良さそうに手を組み，頭を互いにもたせかけるようにして歩いていた。しばらく前方の二人を見つめてだまっていた彼が突然彼女の方をふりかえって，「こういうところを歩く時は手を組むものなのかね？」と言った。

ここであなたは彼女にどうこたえてほしいですか＾

1.　「若い男女が手を組んで歩くぐらい少しも悪いことじゃないと思うわ。私達だってそうしていいのよ。でも前の二人のように人前で頭と頭をも

たせあうようなことまでははずかしくて私にはできないわ。」と言う。

2. 何も言わずに手を彼の方にさしのべる。

3.「そうね，前の二人は手を組んで歩いているし，こういうところでは手を組んで歩く若いカップルが多いようね。でも私達みたいな恥ずかしがりやにはてれくさくてなかなかそういうことできないのね。」と言う。

11

結婚後10年目にして夫婦生活の最大の危機を迎えている夫婦がいた。この夫婦は子供も二人おり，経済的にも決して困ることはなく，夫婦とも社会的にも人格的にも優れていると人々から見なされている人達であるにもかかわらず，お互いの気持がすれ違ってこじれにこじれたあげく，ついに事態は家庭裁判所の調停をうけるまでにいたり，あと一歩で離婚というところにきていた。

妻の言い分によると，「夫は家の外でこそ立派にふるまっているが，家へ帰るとわがままの言いほうだいしほうだいで，思いやりが全くない。それでも我慢して夫の言うままに口答え一つせず一生懸命つとめてきたのに何をしても文句ばかりつけて認めてくれず，最近では家にいる時，ろくに口もきかず，全く私のことを無視している。」という。それに対し夫の言い分は「妻の心の冷たい女で女らしさや暖かみというものが全くなく，いつも私を冷たい批判的な目で見ている。妻はえこじで決して弱音をはかず，悪者はいつも私の方だけで，自分は常に正しいのに苦しめられる殉教者で夫の横暴に黙って耐えているのだというような顔をしているのがたまらない。」という。調停員の努力にもかかわらず，二人の対立はとけず，とうとう離婚するほか道はないということになった。

家庭裁判所からの帰り道，調停員を前に二人で激しい言い争いをくりひろげてきたばかりだったので，妻は身も心も疲れはてて，不機嫌そうな顔をした夫と一緒に，二人とも黙りこくったまま駅へ向って歩いていた。妻は互いに互いを傷つけあう裁判所でのみにくい言いあらそいや，離婚して後のことなど考えると悪夢を見ているような気がして，すべてが現実のこ

とに思われず，これは夢ではないかなどとぼんやり考えながら歩いていた。その時突然，「あぶない！」という叫びとともに彼女は腕をぐいっと強く後へひっぱられるのを感じた。キキーッという鋭い金属音がつづいてきこえた。「あぶないじゃないか！　赤信号だぞ！」という激しい夫の叱声にわれにかえると目の前に自動車がとまっており，歩道から一歩踏みだしたところで夫のうでの中にいる自分を見出した。歩道に戻ると夫は「ばか！いったいどこを見て歩いているんだ！　ちゃんと目がついているんだろう！　だめじゃないか！」と怒声をあびせたが，次に声をやわらげて「もう少しでひかれるところだったんだぞ。」とやさしくとがめるように言った。

ここであなたはこの妻にどうしてほしいですか？

1. 「ごめんなさい。ついぼやっとしていて……。あなたがひっぱってくれたおかげで助かったわ。どうもありがとう。」と言う。
2. 「本当にそうだったわ。あなたが後からひっぱってくれたから間一髪で助かったのね。私ぼんやり考えごとをしていたので信号が目に入らなかったのよ。」と言う。
3. 「こわかったわ……。でもうれしかったのよ。」と思わず涙ぐむ。

12

G君はまだかけだしのカウンセラーで相談所につめとていた。相談所には経験をつんだカウンセラーがひとりいて，G君はそのカウンセラーの指導をうけながら，自分自身も一人の来談者のカウンセリングを担当していた。G君の担当している来談者は中年の婦人で，とくにこれにという理由もないのだが，最近何をやっても気のりがせず，根気が続かず，人生がとてもつまらなく見えて，家に一人でいると気がめいってしかたがないと訴えており，ここしばらく一週間に一回，相談所に通ってきていた。G君の見るところでは，この婦人はつい三カ月程前，結婚して独立した一人息子に去られたさびしさから精神的な不安定に陥っているようだった。G君にとってはこの婦人ははじめてのカウンセリングの相手なので，G君は気負いこんで，カウンセリングの本に書いてあった「来談者の感じていること，思

っていることをそのままに自分自身のものであるかのように共感的に理解する。」ということを忠実に実行しようとした。そこでG君はそのために相手の言うことを少しも誤解のないように把握しようと，婦人が何かを言うたびに，「あなたのおっしゃることはこういうことですか？」とか「それはどういう意味ですか？」とか，注意深く念を押したり，聞きかえしたりしていた。ところがある時G君は指導者のカウンセラーに「君の質問はあの婦人の悩みの解決の助けになっているとは思えない。それは君が彼女の為にではなく自分自身のために質問をするからだ。」と言われて大いに反省するところがあった。

このことがあってから，次に婦人と面接した時，会って少し雑談などかわしたあと，婦人が次のように話しだした。

婦人：　「このあいだから先生にお話を聞いていただいていて，なんとなくこの頃，自分が前よりもよくなってきたような気がするんです。もしかしたらひとりでなんとかやっていけるんじゃないかという感じもするんです。それに今度嫁に行った上の娘が里帰りして赤ん坊を生みましてね。うちの中が急に忙しくなって毎日雑用に追いまくられて家を半日あけるのも大変なんです。朝から晩まで赤ちゃんの世話でバタバタ過しているので体が疲れて，こちらにうかがうのさえとてもたいぎです。主人はそんなに疲れるなら出かけなきゃいいじゃないかなんて申しますの。でもねえ，こちらの先生がこうして私のことを心配してくださるのにうかがわなくては申し訳ないって私言うんですよ。でもまた今度町内の婦人会の役員に選ばれましてね。これからますます忙しくて時間がなくなりますでしょうね。」

この前のことがあってからいままでのやり方を反省していたG君にここであなたはどうしてほしいですか？

1. 「もしや，あなたは相談はきょうでやめにしたいと思っているのだけれども，そう言ったら私が気を悪くするのではないかと気にして遠慮して言いかねていらっしゃるのではありませんか？」とたずねる。

2.　「それは本当にお忙しくて大変なことでしょう。あなたが前よりもよくなってきたように感じられるというのも私とのカウンセリングのおかげというより，あなたが心理的な空白状態でいらしたところへ娘さんが帰ってみえて，赤ちゃんも生れて，忙しさに気がまぎれるようになったためかもしれませんね。」と言う。

3.　「それはそれはお忙しいところを私のことを気づかっておでかけくださってかえってすみませんでした。でもこれからはお疲れの時はどうぞご無理なさらないでください。前もってお電話を下されば私もそのつもりでおりますから……。無理しておでかけいただいてはかえってこちらが恐縮です。」と言う。

13（注1）

仏教の修行においては真の悟りにいたるには，仏と自己の対立をこえて，われが仏であり，仏がわれであるという境地を思慮分別をぬけ出たところで体得せねばならないと言われている。遊行上人一遍は法燈国師心地覚心のもとで修行をつみ，悟りをひらいたが，その以前ある時，一遍は次のような歌で師に自己の心境を披露した。

となうれば仏も吾もなかりけり
　　南無阿弥陀仏の声ばかりして

一遍のこの歌はすでにかなり進んだ境地で詠まれたものであったが，師は一遍の心境はまだ不徹底であるとして認めなかった。一遍の心に迷いが残っていたので声を耳できく感覚作用をいまだ抜けきっていなかったのだ。一遍は深く反省して歌を新たに詠み直した。

彼が師に認められるにはどのように歌を詠み直せばよいのでしょう。（注2）あ

（注1）　この問題は古田紹欽 1961 宗教とは何か――仏教の立場から――東京，社会思想社にのる逸話にヒントを得て作成された。

（注2）　この文のはじめの部分，「彼が師に認められるには」は是非変えるべきだとの一人の治療者の意見があったが，筆者も言われてみればその通りと思うので，今後使用する場合は「彼がどのように歌を詠み直せば師は認めそうでしょうか。」と変えたい。

なたがこう詠んでほしいと思うものを次の3首のうちから1首えらんでください。もしこの逸話を人から聞いたり，あるいは本などで読んで知っていた場合には回答欄の選んだ番号に二重丸をつけてください。

一遍の詠みなおした歌は今度はみとめられて心地は一遍の悟道を印可したと言われる。

1. となうれば仏と吾はひとつなり
　　南無阿弥陀仏の声もきこえず
2. となうべし仏も吾もふりすてて
　　南無阿弥陀仏の声消ゆるまで
3. となうれば仏も吾もなかりけり
　　南無阿弥陀仏無南阿弥陀仏

14

仏教の中でも禅と呼ばれる宗派の教えにおいては，我々が日常行っている相対的，合理的かつ論理的思考を打破し，二元論的論理を超越して事物を本来あるがままの生きた姿において眺めることが求められている。従って我々が普通おこなっている合理的な思考は禅の理解には役に立たない。また禅はこれだと言って教えることもできない。しかし禅は決して突飛なものでも神秘的なものでもなく，逆に禅の真理は最も日常的なものの中にある。次はその禅僧についての話である。

あるところに名僧として非常にほまれ高い僧が住んでいた。この僧のうわさを伝え聞いた近くの寺の住職が，この名僧の教えをさずかりたいとある日たずねて来た。客は僧に会うなり，「仏とは何でしょうか？」とたずねた。するとこの僧はそばにいた弟子に「お茶を一杯持ってきてくれ。」と言った。弟子がお茶を運んでくると，僧は客にそれを「どうぞ，一服。」とすすめた。客はありがたくお茶をおしいただいてのみほした。飲み終えると客は先程の質問を再び聞きかえした。すると僧は「仏はいまここにおられたではありませんか。」と言う。客はびっくりしてあたりをきょろきょろ見まわしたが，まわりには何の変りもない。僧がそばにひかえていた

弟子に「おまえはいま仏がおられたのがわかったかな？」と聞くと弟子ははい。」と答えた。客はそこで「それではそれはどんな仏でしたか？」と弟子にたずねた。

あなたはこの弟子にここでどうこたえてほしいですか？

1. 弟子は客の飲み終えた茶わんをとってさげていった。
2. 「私はおしょうさまの言いつけでお茶を持ってまいりました。お客さまはそれをお飲みになりました。私達がこうしている……，それがそのまま仏でございます。」
3. 「仏というものは口でお教えすることはできません。それをすれば仏の道からはずれることになります。ご自分でさがしていただくほかはありません。」と言う。

15

仏教の修行をつむ僧侶達の守るべき戒律の一つとして，女性に対する欲望を厳しく戒めたものがあった。この戒律は非常に厳しいもので，僧侶は妻をめとることはおろか，女性にふれたり，女性を見てみだらな気持をもつことすらきびしくいましめられていた。

ある時ある徳の高い禅僧が川に落ちて溺れかかった一人の女性を自ら川に飛び込んで救いあげた。岸にひきあげられた時その女性は体が冷たくなって虫の息だった。僧はその女性の唇に自分の口をおしあてて息をふきこんで人工呼吸をしてやり，また冷えた体を全身で抱きかかえるようにして暖めてやった。僧の辛抱づよい介抱のかいあって，彼女はしだいに血の気をとりもどし，さらに根気よく手足をさすってやっているとやがてすっかり元気を回復した。彼女は僧に幾度も礼を言いながら，急を聞いてかけつけてきた家人につきそわれて帰っていった。

僧は寺へ帰ってからだれにもこのことを話さなかったが，村人の口から寺のうちにもこの僧の行いが知れることになってしまった。僧の弟子達の間では，僧が指一本ふれてはいけないことになっている女性を抱いて介抱したということが話題になり，その行いの是非について，さらにはうわさ

の真偽についてまで議論がふっとうした。とうとう弟子のうちの一人が，僧のところへ行って事実をたしかめることになった。代表で僧のところへやってきた弟子は次のようにたずねた。「おしょうさまが水に落ちた女を救いあげられて，介抱する時その女を抱かれたというのは本当でございましょうか？」

ここであなたはこの僧にどのように答えてほしいですか？

1. 「それは本当だ。しかし，あの時女は虫の息でそうでもせねば生き返らない状態だった。そのような人の生命にかかわる危急の場合にはいかに厳しい戒律といえども破って人の命の方を助けるのが本当の仏の心というものだと思う。」と言う。
2. 「私はその女を抱いたりしたことは一度もない，そなたたちこそいつまで女を抱いているのだ。」と言う。
3. 「なぜそんなことをきくのだ。そのような質問にはわしは答えぬ。わしが女を抱いたとか抱かぬとかそんなことを問題にすることからして戒律からはずれているのだ。帰って皆にそう伝えよ。」と言う。

選択肢項目のカテゴリー表

問題番号		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
選択肢番号	1	O	S	O	M	S	N	M	S	O	M	M	S	O	S	O
	2	S	O	M	S	O	S	O	M	S	S	O	O	M	O	S
	3	M	M	S	O	M	O	S	O	M	O	S	M	S	M	M

APPENDIX 2

寄せられたコメントにこたえて

本研究の治療者の被験者から数々のコメントが寄せられたが，そのうちの主なものをここに紹介し，筆者(佐々木)の感想をつけ加えたい。

第一に，かなり多くの被験者から選択肢項目の少ないことについて苦情があった。項目数が少なすぎてぴったりしたものがなくて選びにくい，5

項目もうけてはどうか，あるいは自由に回答を書かせてはどうか，などの意見である。これについては先に注で述べたように5選択肢の質問紙で予備調査を行なったが結果がおもわしくなく，今回は3選択肢であきらめざるを得なかった。できれば少くとも5選択肢もうけることが望ましいが，互いにはっきり識別しうる多くのカテゴリーとその具体的行動を考えることは実際大変である上，それ程多くのカテゴリーの行動が可能な問題状況の設定は非常に難しい。というのは設定された問題状況はそのあとS型の行動が出てくるのがある程度自然なような場面に限られているので，そのあとに続いて起り得る行動もまた限られてくるからである。また，自由に回答を書かせることについては，本研究の目的がS型の行動についての態度を調べることにあるので，研究を効果的に行なうためにS型の項目を含めて選択肢を設ける方が都合がよかったことと，また選択肢の中で自然反応型の行動の具体的なイメージを与えたかったこと，またその行動の妥当性を調査で確かめたかったこと等のため選択肢を用いることになった。自由に回答を書かせてそれを分類してみるのもそれはそれで大変興味深い研究となると思う。

第二に，「…さんにどうしてほしいですか」という質問の問い方についての疑問が多く寄せられた。この人にはこの反応が自然だろうという考え方で回答を選びたくなったり，私だったらこうするという観点からしか選べなかったり，とか，…してほしいとはその時のその人らしいということを基準にするのか，その人にとってたとえ無理であっても理想としてこうできればいいということが基準なのか，などのコメントに見られる疑問が一つ。カテゴリーSはある行動が意図的にではなく，自然に出てくることを意味しているので，なるべくS項目は理想としてもふさわしく，かつその人らしさ，自然さも損わぬように作られていることが望ましい。とはいえ，S項目の行動があまり自然すぎて，誰の目にもこうするのが当然とうつる程になったら問題の弁別力がなくなってしまう。本研究の質問紙は，人がこのような問題場面に遭遇した時，もしその人が無心にそこに起こり

つつあることを感じとることができたならば，たいていの人はこのように感じ，その結果たとえばこのような行動をとるであろうという行動，すなわちここではＳ型と呼ばれる行動の一般的なものについて調べようとするものであり，正直なところ個々人の個性による違いまでは念頭にいれて作られてはいないのである。しかし，問題文で当事者の持つ問題を強調しようとする余り，個性が強く出すぎてしまったかもしれない。そのようなわけで，先の被験者のコメントの言葉で言えば，質問紙で問おうとしたのはその人らしさより，むしろこうできればという理想である。しかし筆者は，たとえ無理であっても，とは言わない。無理だとは思わせぬ状況設定と項目を望みたい。

上記の問題ともかかわってくるが，どうしてほしいとたずねられてもどうしてほしいとも思わない，とか，相談する際に予め相手にこんな行動をとってほしいとは期待しない，などのコメントに代表される疑問がいま一つある。クライエント中心療法の，あるがままの相手を受け入れるところから治療が出発するという基本的な考え方からすれば，出てくるのが当然の意見といえるかもしれない。しかし治療者が目前にいる相手をあるがままに受け入れるということは，悩んでいるその人がいつまでもそのままでいればよいということは意味しないはずである。多少逆説的になるが治療者とはあるがままのクライエントを受け入れつつ，クライエントをある方向に導いている…そういうものではないかと思う。その導いている方向を筆者は探りたかったのである。「どうしてほしいですか」という聞き方はそれを聞き出すのに説明不足であろうか。前述の問題ともからめてどのような聞き方が最もふさわしいであろうか。筆者自身未だこれぞと思うものを見出せないでいる。

佐々木(石沢)由利子―研究当時本学大学院修士課程在学
星　野　　命―本学教授(臨床心理学)

ABSTRACT

THE ATTITUDE OF PSYCHOTHERAPISTS TOWARD THE MANNERS OF ACTION IN THE PROBLEMATIC SITUATION

by

Yuriko (Kokuzawa) Sasaki
Akira Hoshino

The purpose of this study is to investigate whether or not psychotherapists have the following view of life, which one of the authors (Sasaki) thinks is somewhat similar to the view of life in Zen Buddhism, by studying the attitude of psychotherapists.

The view is as follows: Excepting those problems which can be solved by external treatments or measures, an individual overcomes his own problem and achieves psychological adjustment not by looking at the problem objectively and seeking the measure to solve it, but only by living the present moment as he *is* in the situation. To live as he *is* means to act spontaneously according to the feelings which occur inside of him as a result of the development of the situation. At that moment the individual lives the solution of his problem whether he is aware of it or not.

A questionnaire was developed by the author for the purpose of measuring psychotherapists' attitude. There are 15 small problems in the questionnaire. Each problem consists of a story of a problematic situation and three choice items which describe three possible actions of the person in the situation, from which the subject is asked to choose the more favorable action.

Three choice items in each problem were made according to the following categories.

Moral-norm type (category M)……The person acts according to the moral or norm which he thinks is relevant to the situation.

Objective understanding type (category O)……The person understands the problem objectively and tells the other person what he understands.

Spontaneous response type (category S)……The person acts spontaneously according to the feelings which occured in him as the result of the development of the situation.

Category M and O belong to the type of action in which the person looks at the problematic situation including himself as an object in order to find the solution and takes an intended action to solve the problem. Category S belongs to the type of action in which the person lives the present moment just as he *is*. He does not look at the problematic situation including himself as an object, nor takes any intended action to solve the problem.

The hypothesis is as follows: Psychotherapists would choose more of spontaneous response type items and less of moral-norm type and objective understanding type items in comparison with non-psychotherapists.

148 subjects (59 therapists and 89 non-therapists) answered the qusetionnaire. Out of 89 non-therapists 63 subjects (over twenty-four years, old having no experience of study or training in psych otherapy) were chosen as a control group which is compared with therapist group.

The results obtained were as follows: The difference of distribution of choice for each problem between therapists and non-therapists was examined by χ^2-test. The result confirming the hypothesis was obtained in 9 problems for category S, 5 problems for category M and 3 problems for category O. The result denying the hypothesis was obtained in no problem for category S and M and 3 problems for category O. The differences of the amount of scores obtained between therapists and non-therapists were examined by

t-test. As the result therapists were found getting higher S scores and lower M scores than non-therapists. No difference was found as to O score.

According to the results of this study psychotherapists seem to have the above-mentioned view of life.